

## 36 出土医書に見る「痔」の一考察

吉岡 広 記

日本鍼灸研究会

馬王堆出土の『足臂十一脈灸経』『陰陽十一脈灸経』『五十二病方』、張家山出土の『脈書』に、医書としては最古の「痔」の用例がある。そこには、後代で言うところの「五痔」に相当する記述があり、戦国末期～前漢初期にはその前駆的分類があったことを示す貴重な資料となっている。「五痔」は、出土医書に遅れること数世紀、空白の時間を経て六朝～隋唐期に形成された「痔」の分類である。後代の「五痔」との関係に留意しつつ出土医書中の「痔」を見ていくことにする。

以下、「痔」の名称と、その中での症状群を分類し、番号を振り列挙した。本文の假借字は全て変更した(久↓灸、空↓孔など)。「五痔」に当たるものは、『諸病源候論』(以下『病源』と略す)の経文を附し、各症状群の類文がある場合はその末に書名を記した。

## 【分類された「痔」】

牡痔(肛辺生鼠乳出在外者。時時出膿血者)：『五十二病方』①「羸肉出〔龍門方〕・雄痔」、②「如鼠乳状。末大本小。有孔其中〔刪繁方〕『集驗方』『病源』『千金方』」、③「多孔者」、④「居竅旁。大者如棗。小者如棗核〔龍門方〕・雄痔」、⑤「居竅廉。大如棗核。時癢時痛〔龍門方〕・雄痔」、⑥「脈書」〔在篡。癰如棗〔龍門方〕・雄痔〕。牝痔(肛辺腫生瘡而血出者)：『五十二病方』⑦「入竅中寸。状類牛蟻。：後而潰出血。不後上向者」、⑧「有孔而彎。血出者」、⑨「有数竅。螻白徒道出者〔病源』卷十九・九虫候など」、⑩「脈書」〔在篡。癰如棗。：其癰有孔。汁出。脈痔(肛辺生瘡。痒而復痛出血者)：⑩「名のみ」。血痔(因便而清血隨出者)：⑪「名のみ」。他：『五十二病方』⑫「未有巢者」、⑬「巢塞腫者」、⑭「痔者其腫旁有小孔。孔兌兌然出。時從其孔出有白虫」、⑮「痔」。

「五痔」のうちの腸痔を除く四種はすでに存在するが、必ずしも後代の認識とは一致せず、より詳しい病態の叙述がなされている。また、後代では見られない症状

群もいくつかあり、その分類の豊富さが伺える。その他、『釈名』に見られる「虫」が原因で「痔」を発症するという認識がすでにあったことも⑨や⑫（以下の治療を参照）⑭によって知れる。

【足太陽経の所生病としての「痔」】

⑬ 『足臂十一脈灸経』「足太陽脈…其病…産痔」、⑭ 『陰陽十一脈灸経』「足鉅陽之脈…其所産病…痔」、⑮ 『脈書』「鉅陽之脈…其所之病…痔」（皆「靈枢」経脈篇と対応）。

【内服薬を除く「痔」の治療】

①③ 「疾灸熱」、④ 「以小角角之」「剖以刀」、⑤ 「剗之」「燔小楯石…以熨（尉）」、⑥⑧ 「熏痔」、⑨ 「坐熏下竅」、⑩ 「不明記」、⑪ 「氣熨」、⑫ 「置盤中而踞之。其虫出」、⑬ 「除以刀剗去其巢」、⑭ 「令烟熏臚」、⑮ 「熏篡」、⑯ 「灸太陽脈」、⑰⑱ 「灸か？」。

①③⑥⑧⑯は灸、④⑤⑬は外科的処置、⑥⑧⑨⑫⑮は熏治、⑪は熨法、⑫は薬浴となっている。灸については具体的な壮数や艾炷の大きさに関する指示は見られない。外科処置は、刀や砭石を使用するが、その

際に縄を用いて突出した患部を縛る、あるいは孔に空気をを入れて膨らますなどの切開の便を良くするための様々な工夫がなされる。いずれの場合においても薬の併用が大きな特徴である。

出土医書に見られる「痔」には、総称としての「痔」と、後に分類整理される「五痔」としての「痔」という二つの側面がある。前者は、医書以外にも春秋・戦国時代以来広く用例が見られる。それに対し後者は、より病態に合った治療の要求から、詳細な観察を通して分類されていると考えられるが、後漢～三国時代はその姿を消し、六朝期に至って突如として出現するという経緯をたどる。これは、前漢から後漢にかけてロジカルな医学理論の展開があったことと関わりが深いのではなからうか。今もって人を悩ます「痔」は、古来より同様に問題となっていたことが想像されるところに、その観察力に驚かされる。